

病苦を抱えた場合における仏教的資源の可能性

花園大学 西岡秀爾

1. 序論

これまで発表者は、仏教的資源について、I. 仏教的用具 (仏壇、墓、仏像、地藏など)、II. 仏教施設 (寺院、四国八十八ヶ所霊場など)、III. 仏教行事 (葬送儀礼、法事、月参りなど)、IV. 仏教者 (僧侶、ビハラー僧など) の 4 つに分け、各々のグリーフケア装置としての役割に注目してきた。従来、仏教の社会貢献がテーマとして上げられる際、仏教者が主として介在する資源 (III, IV) についてはある程度論究されてきたが、その場に仏教者が不在でも活用される物的資源 (I, II) についてはあまり取り上げられることはなかったように思われる。

自らの病んでいる部位を撫でると除病の功德があるとされる賓頭盧尊者 (なで仏) は、善光寺をはじめ、東大寺、四天王寺、四国八十八ヶ所など全国各地で見られ、参拝客にとって身近な存在であり続けてきたといえよう。また、病が快復するという伝聞から、とげぬき地藏、釘抜 (苦抜き) 地藏、目やみ地藏などの地藏菩薩のある場に足を運ぶ人は、今も昔も後を絶たない。拙寺にも足の病にご利益があるとされる足立地藏が安置されているため、そのご利益にあやかるために熱心に訪れる人を目にする。さらに、病を抱えた檀信徒から、仏壇、墓、そして、本堂の前において先祖 (特に、身近な故人) や本尊に向かって「守ってください」と加護を願うことがあるという話を一度ならず何度も聞いた経験がある。

本発表では、病苦を抱えた人たちにとって、「仏教的用具 (I)」や「仏教施設 (II)」がどのような役割をなしているのかについて、当事者の声からその一端を考察してみたい。それゆえ、文献学的考察ではなく、社会学的考察となる。

2. 本論

初めに、不治の病で知られる ALS 患者の闘病記に当たると、信仰に対して慎重な人たちも藁にもすがらる思いで、祈ってもどうにもならないと察しつつ、「神頼み」(土屋敏昭, 1989 : 163 ; 土屋とおる, 1993 : 56) をしていることが確かめられた。

次に、発表者が配偶者を亡くした人たちに実施したインタビュー調査では、研究協力者自らが病を抱えた際に、仏壇や墓を通して、亡き配偶者 (新仏) からの恩恵を願っている営みが明らかになった。例えば、寡夫の A さん (63 歳) は、飲酒のドクターストップがかかるほどの心臓病を抱えるが、墓参りを習慣とし、亡き妻に対して「私の病気が治るように」というお願いをしていた。そして、お遍路結願を「生きがい」として、歩き遍路中に亡き妻に会えることを期していた。他にも寡婦の B さん (65 歳) は、乳がんを患いホルモン治療中であるが、仏壇の前で、亡き夫に対して「生きるのってしんどいね」といった苦悶を吐き出していた。

3. 小結

病苦を抱えた当事者の語りから「仏教的用具 (I)」や「仏教施設 (II)」の物的資源は、仏の加護を願ったり、日頃の複雑な思いを吐露したりする場となるため、病苦を和らげる一助になり得ると考えられる。

〈キーワード〉病苦、仏教的資源、仏の加護、吐露する場